

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

巻頭言

『2021年度のご挨拶』

石井 清志（国際リハビリテーション研究会理事、
国際医療福祉大学成田保健医療学部作業療法学科）

2019年の年末から世界的な広がりを見せているCOVID-19ですが、2021年度もその様々な影響のもとで始まりました。これまでに2度の緊急事態宣言を経て、ようやくワクチン接種が始まっていますが、東京オリンピックはどうなるのでしょうか。

さて、国際リハビリテーション研究会もCOVID-19の影響を受け、様々な活動がオンラインでの開催からオンラインへと移行しました。やはり催し物は対面がいいなあと思う一方で、幅広い年齢層や職種の人々が物理的な制約を超えて集うことが出来るオンラインは、まだまだ小さな組織である「国際リハ」の裾野を広げるにはよい機会になったのではとも感じています。不定期のイベントとして始まった「リハカフェ」も東京以外の、関西、東北をキー局とした開催実績を積み重ねてきています。これからも会員の皆様の活動がより多くの方々の興味・関心をひきつけ、当会の活動が浸透していけばいいなと思っています。

私は主に学術部の担当理事として活動していますが、今年度は学術誌において査読付き論文を発表できるような体制作りを進めていきたいと考えています。COVID-19の影響により、海外渡航がままならない状況が続いていますが、「そんな時でもできること」あるいは、「そんな時だからこそできること」が有るのではないのでしょうか。そのような皆様の活動を学術的な成果物として発信し、一人一人の知見を社会に還元していければと考えています。

[特集] 中央アジア ウズベキスタン共和国 -JICA海外ボランティアの経験から-

今回は、ウズベキスタンに派遣されていた元JICA海外協力隊の二人から、「子どものリハビリテーション」をテーマに紹介します。

ウズベキスタンは中央アジアに位置し、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、アフガニスタン、トルクメニスタンに囲まれた二重内陸国である。

かつては東西交易路シルクロードの中継地として栄え、

1991年ソビエト社会主義共和国連邦の解体に伴って独立した。

人口は、約3,300万人。公用語はウズベク語（ロシア語も広く使用されている）。



川野 晃裕（JICA海外協力隊 2018年度2次隊、株式会社 東京リハビリテーションサービス 東京リハビリ訪問看護ステーション キッズ世田谷）

Ассалому алайкум（アッサロームアレイクム：こんにちは）。私は2018年10月から2020年4月まで首都タシケントの郊外にある“国立小児リハビリテーションセンター”で活動をしていました。タシケントは、2017年の新大統領就任を機に、高級外資系ホテル・チェーン店が増え、急速なインフラ整備が進んでいます。そのような中、中心街からバスで1時間弱の郊外にある配属先は、医療機関でありながら建物の老朽化・設備不良が顕著でした。



主に使用していた運動療法室にも電気がほぼなく、トイレの水が流れない等地域格差・生活格差をととても感じました。配属先は、国内全土の3～18歳の脳性麻痺・二分脊椎・ダウン症・側弯症などの子どもたちをリハ入院（40日前後）という形で受け入れていました。ウズベキスタンには理学療法士が存在しないため、『理学療法＝物理療法とマッサージ』と認識されており、それらを主に看護師が行います。配属先には1) 運動療法、2) パラフィン等の物理療法、3) マッサージの3部門があり、私は運動療法を行う看護師5名と



主に関わりました。配属当初、同僚から『10人前後のグループでの集団体操20分・個別リハ25分の計45分を1日数グループ行っている』と説明を受けました。しかし実際は『〇〇をやりなさい』と口頭指示するだけで、寝たきりの児は長時間放置され、各グループ10分程しか行われていませんでした。また、牽引や強引な他動運動など誤った治療も多く、泣きながら治療を受けている子もいました。1年目は拙いウズベク語で同僚に意見をぶつけることも沢山しましたが、良い方向に進みませんでした。それでも子どもたちが運動経験を積めるように立位練習や歩行練習などを日々行いました。2年目に入り、①患児ごとの運動療法シートの作成、②“世界の笑顔のために”プログラムにて日本から下肢装具の寄贈を行いました。必要な情報や環境を整備する中で、自然と同僚が歩行介助などを行い始め、スケジュール通りに臨床が進むことが増えました。



Covid-19の影響で帰国となり、定着まで関わることはできませんでしたが、改めて考えを押し付けるのではなく相手の気持ちに寄り添うことの大切さを実感しました。そのほかに、医療機関・障害児幼稚園・国立大学日本語学部にて計5回のセミナーと2回の地方出張を実施し、理学療法普及活動も行いました。リハ職のいない世界に孤独さを感じることもありましたが、自分にできることを考え、アクションを起こすことで、多くの経験・人との繋がりを得ることができました。第2の故郷となったウズベキスタンのさらなる発展に今後も関わりたいと思います。

大西 海斗（JICA海外協力隊 27年度3次隊、びわこ学園医療福祉センター草津、日本福祉大学大学院国際社会開発研究科[障害と開発]）

「正しい問いは、まだまだ遠い。問いそのものについて問い続ける。」

2016年に滋賀県を発ち、ウズベキスタンの東の地域フェルガナ州に赴任しました。帰国後3年がたった今、改めてJICA ボランティアにおける経験を振り返りたいと思います。とはいえ、派遣されていた時は目下の課題に必死に取り組んでいましたが、今問い直すと反省点ばかりが蘇ります。何よりウズベキスタンの現場を経験し感じたのは、[開発の視点]と[子どものリハビリテーションの視点]はよく似ているということでした。関係づくり、中・長期的な視点、多くの支援者や家族が関わること、自発性の視点など重なる部分の多さを認識できました。



例えば、子どもは、初めて会った我々を「敵か味方か」そんな見方をよくします。彼らが敵と思えば、リハビリどころではなく、お話しすることも、横にいることさえも許してもらえません。だからこそ、こちらが言わなくてもやりたくなくなってしまうような仕掛けが必要で、それはもしかすると遊びかもしれないし、“カワイイ”や“カッコイイ”のようなデザインかもしれないし、はたまた声の掛け方ひとつで変わるかもしれません。この部分は、いつも悩まされる場所ですが、もっと言えば、小さな立ち振る舞いといった礼儀や作法は、現地の方と活動するときにはいつも重ね合わせて考えるようにしていました。

そしてもうひとつ、子どもや家族（患者）から不平・不満が出てきにくいということ。どうしても理学療法士や医師などの医療従事者、とすれば教育の場の学校の先生もそうかもしれませんが、やはり患者や生徒からは本心やデマンドが表出されにくい。だからこそ、そういう立場にあるという自覚を持っておかなければならないということも常に意識してきました。これらも、国際協力や開発の視点と共通しているようにも思います。

しかし、振り返ってみれば「開発」も「発達」も英語では“Development”。共通していて当然なのかもしれません。

協力隊の2年間でドイツの哲学者ショーペンハウアーの言葉を借りると“人生は刺繍である”と重なります。たった2年という短い時間でしたが、“前半は表を見ることになる。しかし後半は裏を見ることになる。美しくはないが、繋がりがわかり、学びになる”

「Cure」から「Care」の本質が問われる時代となることが示唆される今だからこそ、社会的な 이슈 とともに、子どもや家族が送っているメッセージを必死に読み取り、「彼ら」がどう感じているのかを大事にしていきたいですし、何よりそれを小さなピクチャーではなく、大きなピクチャーとして広く見ていきたいと考えています。これが国際リハを学んでいる私の現時点での目標であり、結論です。



[連載] 山口高橋の 研究万華鏡*

国際リハビリテーション研究会ではこれまで3年にわたり3度の学会を開催しました。その中で、「研究に興味はあるが、何をすればよいか分からない」「自身の国際協力の経験について発表したいが、どうすればよいか分からない」といった声がしばしば寄せられています。どうしたら、より多くの方々に発表をしていただけるか。そんな中、事務局・山口佳小里と高橋恵里の思い至ったのが本連載です。

『学術領域を考える』

学術領域と聞くと皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。科学研究費助成事業（科研費）の審査区分を見ると、実に6つの大区分に64の中区分、さらには306もの小区分に分類される学術領域があります。国際リハビリテーションに関連のある学術領域も、文化人類学、地域研究、ジェンダー研究、社会学、社会福祉学、特別支援教育、公衆衛生学・・・と多岐にわたります◆「学術領域が変われば、文化が変わる」ということがあります。例えば、かつて神経科学研究に従事していた時代のこと、アメリカで開催された国際学会に参加すると、参加者は皆ラフなジーンズ姿で、質疑応答においては、質問者は早速質問から入ります。さながら研究室でのディスカッションのような雰囲気です。一方で、医学系の学会となると様相が変わります。スーツ姿の人が多い。そして、OT学会などでもみられることですが、質問者は「貴重なご発表ありがとうございました」「〇〇病院（大学）の△△と申します」という文言から質問を始めます◆学術領域によって異なるのは文化だけではありません。行われる研究の種類も領域によって様々です。調査研究、実験研究、介入研究etc・・・研究の種類が異なれば、当然、研究手法・分析方法も異なります◆これから研究を始めようと考えている方は、ご自身の興味がどのような学術領域に相当するのか、そしてその領域ではどのような研究手法を用いるのか、確認してみるとよいかもかもしれません。大学院への進学を考えている方は、その大学院でどのような研究手法が習得できるか考えてみるのも良いかもしれませんね。

[コラム] 大室和也の『世界のめがね』

大室 和也 (国際リハビリテーション研究会理事、認定NPO法人 AAR Japan [難民を助ける会])

【ガイドブック】

事務局担当の大室理事は佐賀を拠点に世界中で活動を展開中です。このコラムではそんな大室理事のメガネを通じた世界の姿を毎号お届けします。



コロナ対策として、ザンビアの地方都市の空港で出入り口に手洗い場が設置されています。街中のスーパー、行政機関も同様です。

地球の歩き方、ロンリープラネット、指差し会話帳。みなさんは海外に行くときにどういう本を持っていますか？これらは旅の途中で役に立つもの、ガイドブックの類です。ガイドブックなので、世界各国どの国も出版されていると思います(多分)▼私が今回注目したいのは、「〇〇を知るための〇章」という本です。巷では「知るためのシリーズ」と呼ばれているとか。この知るためのシリーズは、ガイドブックよりは学術的で、地理、文化、歴史、産業などを包括的にまとめてくれているので、海外で事業をするときなどはとても役に立ちます▼このシリーズに、最近ザンビアが追加されました。私は今、「ザンビアを知るための55章」をザンビアで読んでおり、目から鱗をひらひら落としているところです。こうした本の一章は、障がい分野の話が記されるよう、国際リハ研究会の貢献度を上げていきたいですね▼とはいえ、本から得られる利益は大きいですが、結局は、現地の人たちからガイドされ教わることの方が多いです。それを大事にしないと事業はうまくいきませんし、それこそが現場の豊かさだと思います。

【お知らせ】

【国際リハカフェnorth, east, west始動!】国際リハカフェが体制を新たにしました。

2021年2月にwest tele.1「日本で働きながらの国際協力: ReCA マレーシア事業担当としての活動」を、3月にnorth tele.1「元JICA青年海外協力隊PTの活動報告会」を開催しました。

5月2日にはeast tele.1「ベトナム理学療法士養成校での教員経験を語る」を、

5月22日にはnorth tele.2を「東日本大震災後の支援」の内容で開催予定です。是非ご参加ください!

【国際リハビリテーションセミナー2021・第4回通常総会開催】

6月19日(日)に開催します。詳細は追ってメールリストやFaceBook等でご連絡いたします。

編集後記

記事全体を拝読させていただき、現地での活動に関しても研究の内容に関しても様々な「人」と関わることにより道筋が見えてくるのだと改めて感じました。コロナ禍の状況は続いています、関わりの多い2021年度にしたいと感じています。(古川 雅一)

今回は私自身が、協力隊時代を思い出し、そして振り返る機会となりました。私が何をしてきたのか、ではなく、現地の「子どもが」「家族が」「スタッフが」どう思い、どう感じていたか、“主語”が誰なのか、そう自分に問いながら、考え直してみました。今年度もよろしくお祈りします。(大西 海斗)

事務局 編集担当

高橋恵里 (東北福祉大学健康科学部リハビリテーション学科) 古川雅一 (仙台医健・スポーツ専門学校理学療法科)
大西海斗 (びわこ学園医療福祉センター草津) 山口佳小里 (国際医療福祉大学成田保健医療学部作業療法学科)

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/>

【お問い合わせ】国際リハビリテーション研究会事務局 jsir_office@gmail.com

